

教宣 せぶん

拉致問題と制度廃止問題

今回の会社の「第三次募集」の出方については、色々な見方や分析があります。「私たちのたたかひの成果なのだから充分評価して良い」という意見から、本誌のように「原点に戻っただけ」「組合差別や都労委の勧告に対する謝罪や弁明が聞かれないのはおかしい」という声まで、結構「幅がある」と言って良い状況だと思います。どれが正しくて、どれが間違っているというのではなく、それぞれが率直な感想だし、分析だし、そういった意味ではどれもが「正解」です。そういう組織全体の声や分析を大切にしながら、油断することなく、ぬかりなく、自信をもって、今後のたたかひや運動をすすめていければと思います。

さて、そんな「分析」にもう1ページ加えたいと思いますが、今回の会社の出方を見ていると、拉致問題における北朝鮮側の出方と横田ご夫妻のスタンスを思い出してしまいます。

まず北朝鮮側は、拉致問題の象徴とも言える「横田さん」の訪朝を画策します。孫だとされる「ヘギョンちゃん」を登場させ、「おじいちゃんやおばあちゃんに会いたい」と言わせ、横田さんを揺さぶります。孫との再会を演出することで拉致問題全体の終焉を狙ったものと言われてはいますが、横田ご夫妻は動じることなく、決して北朝鮮に行くことはありませんでした。次に北朝鮮側は、めぐみさんのご主人の可能性が高い韓国人拉致被害者、金英男さんの所在を確認したことを明らかにし、韓国と日本が拉致問題で歩調を合わせる動きを牽制します。金さんのお母さんをはじめとするご家族は息子との再会のため訪朝を決定したようですが、やはり横田さんは決して動じませんでした。そして、わが子に再会できる金さんのお母さんには、もちろん「会わないでくれ」とも「全体像を考えて欲しい」とも言わず、心からのねぎらいや祝福の言葉をかけています。

第三次募集が行われることによって、もちろん私たちの組織は人数が減ることになります。募集が実施されれば、理論的には「原告団」と「内勤の道を望む者」が残ることになりますが、実質的には「原告団」しか残らなくなるでしょう。だからと言って、本部や支部執行部・原告団が、代理店転進の道が開けた者に対し、当然「行かないでくれ」とも「全体像を考えて欲しい」とも言いません。なぜなら基本方針がある

からです。基本方針を立てた時から、遅かれ早かれ、こういう局面が来ると言うことは誰もがわかっていました。なぜなら基本方針が、一人ひとりの声や要求を大切にするものだったからです。

私たちは横田ご夫妻同様、決して目の前の「敵」に惑わされることなく、初志を貫いていきます。蓮池さんや地村さん・曾我さんがそうであったように、目的を達成された方が「拉致問題が終わった」と感じていないのと同様、転進支援を受けて代理店になる私たちの仲間も自分の目的が達成されたからと言って、当然今回のこの制度廃止問題が終わったとは思わないでしょう。終わったと言える時は、拉致問題では拉致被害者全員が帰国できた時であり、私たちで言えば、地位確認が決定した時です。立場や環境が変わっても、「一人はみんなのために、みんなは一人のために」たたかっていくのが真の労働組合ですし、真の労働組合に所属するのが私たち全損保日勤外勤支部です。

たたかいは新たな局面を迎えますが、胸を張って、堂々と、狡猾な経営と対峙していきましょう。